

[資料]

グジャラートとヒンドゥスターンに  
おけるオランダ東インド会社  
1620年—1660年  
(Ⅳ)

H. W. ファン・サンテン  
長 島 弘 (訳)

第1章 ムガル朝インドにおけるVOCの貿易

1. 1 序論

アジアにおける会社の貿易システムにおいてスーラトの商館は2つの重要な機能を果たした。まず第1にスーラトは輸出入の港として機能した。会社はそこで、香料、銅、錫、白檀、胡椒、安息香、樟脳、より重要性の劣るいくらかの品々などのアジア物産、および朱、水銀、毛織物<sup>ウール</sup>、鉛などのヨーロッパから送られてきた商品——それらはグジャラートやヒンドゥスターンの販売市場に向けられた——を陸揚げし、ヨーロッパやアジアの販売市場に向けられる藍、綿布、その他多数の物産を荷積みした。第2にスーラトは地域センターとしての、また西部アジア〔インドの西海岸も含む〕での会社のアジア域内貿易のための積替え港としての役割を演じた。それゆえインドで買われた商品の一部は、アジアにおけるVOCの中心的な主要市場たるバタヴィアへ送られずに、アラビア半島の南端に位置する

モカ、あるいはペルシアやバスラでの直接貿易において売られた。

VOCの西部アジアにおける貿易活動の形態はまず第1にモンスーンによって規定された。5月－9月の間の時期には卓越した激しい南西モンスーンによってこの海域での航海は不可能であった。9月と10月には風向きが変わり勢力が衰えた。その直後から帆船がスーラトに到着できた。おそくとも4月末あるいは5月初めまでに各船はスーラトから帰帆してしまうべきであった。それゆえ貿易シーズンは9月から5月までであった。

西部アジアにおけるVOCのこのかなり複雑な貿易ネットワークは会社のこの地域における一貿易シーズン中の全ての船の行動を記述することによって最もよく例示できる。たとえば1642－1643年のシーズンにおいては、まず最初に1642年9月にフリーヘント・ヘルト号がモカからスーラトに到着した。その船にはモカからムガル朝インドの諸商館向けの鑄貨・未鑄貨の金銀、ペルシア向けのコーヒー、バタヴィア向けの没薬が積まれていた。フリーヘント・ヘルト号は島嶼部からの香料その他の商品とムガル朝インドの綿布を積んで1642年2月にスーラトからモカへ向けて出帆していたのである。諸船はモンスーン風の転換の直後にモカからスーラトに戻った。したがってスーラトとモカの間の商取引は2つの貿易シーズンにまたがっていた。1642年12月に5隻の船、すなわち、レーウワールデン号、マーストリヒト号、ノールトステル号、ハーゼヴィント号、アイトヘースト号が香料類および錫、ピューター〔しろめ、錫の合金〕、樟脳、明礬、白檀等々の他のアジア物産を積んでバタヴィアからスーラトに到着した。それらの船はまたヨーロッパから送られた金と銀を運んできた。到着後に積荷のうちスーラト向けの部分が降ろされた。残りはペルシアとモカに向けられていた。1643年3月に直接台湾からパーウ号が到着した。同船は他の品とともにスーラト向けの30万グルデン相当の日本からのスホイット銀〔丁銀〕を積載していた。セイロンからパーウ号はレーウエリク号によってエスコートされた。後者は高価な積荷の船をマラバールの海賊から防衛しなければならなかった<sup>1)</sup>。

11月から3月、おそくとも4月までの月々に何隻かの船がスーラトとバンダル・アッパースの間の航海に従事した。スーラト到着の10日後にマーストリヒト号とアイトヘースト号がバタヴィアからペルシア向けに積まれた商品を搭載して出帆した。これらの船にはバンダル・アッパース向けのインド商人たちの商品も運賃支払いの上で積込まれていた。2, 3週間後にフリーヘント・ヘルト号, ハーゼヴィント号, レーウワールデン号が, そして3月にはパーウ号とレーウェリク号が, ムガル朝インドで製造された綿布および先にフリーヘント・ヘルト号でモカからスーラトに運ばれてきたコーヒー, そして最後にインド商人たちの運送貨物を積んで, 続いた。2月, 3月, 4月に上述の諸船が, アッパースー貨 (ペルシアで流通している銀貨), レアール・ファン・アフテン貨 [スペイン銀貨], 銀の地金——次のシーズンのペルシア市場向けの綿製品のムガル朝インドでの買付けの資金とするために——, スーラトで売却する商品, バタヴィア向けの物産, そして最後にインドおよびペルシアの商人の運送貨物を積んで再びスーラトに戻ってきた。アイトヘースト号はバンダル・アッパースから戻ってきた後, アフマダーバードとアーグラからの綿布やバタヴィアから送られてきた商品のうちのモカ向けの部分を積んで3月にモカへ向けて出港した。次の貿易シーズンの9月にアイトヘースト号はデユカート貨 [金貨] とレアール・ファン・アフテン貨, ペルシア向けのコーヒーを積んでスーラトに戻って来る予定であった。ゴアの封鎖を強化するために1643年1月にノールトステル号も積荷なしで出帆した。最後にずっととどまっていた3隻の船が5月初めにバタヴィアへの帰りの航海を行なった。それらの船は, ペルシアから送られた商品とともに綿布, 藍, 硝石, ダイヤモンド, 米, そしてムガル朝インド産の若干の他のより重要性の低い物産を含んでいた。

それゆえ, 17世紀前半に発達したところの貿易パターンは, アジアにおける会社の中核的<sup>スターベルマルクト</sup>主要市場であるバタヴィアといわば二次的あるいは地方的貿易センターであるスーラトとの間の直接的結合からなっていた。西

部アジアにおいてはこの二次的センターから会社のアジア域内貿易が展開されたのである。

スーラトが1つの<sup>アントレポール</sup>貨物集散地の役割を果たしたVOCのこの貿易ネットワークの内部で、時の経過と共に若干の変化が起こった。1650年以後貿易結合のネットワークがバスラ（一時的にだが）、ヴィンゲルラ〔インド西南部の港〕、さらに後代にはマラバルへと拡大された。次に1655年以後モカでのVOCの地域間貿易が減少した。貿易形態上の別の重要な変化は1636年頃に起こった。その年にVOCは共和国〔本国〕とスーラトあるいはバンダル・アッパースとの間の直接の貿易結合を断った。1623年—1626年および1634年—1635年に本国からの何隻かの船がバタヴィアに寄港することなく直接にスーラトあるいはバンダル・アッパースに航海した。1623年—1637年には、1625年—1626年および1628年—1631年を除いて、毎年1隻—4隻の船がバンダル・アッパースあるいはスーラトから直接アムステルダムへ向けて出帆した。ペルシアの絹 zijde〔生糸〕とムガル朝インド産の藍と綿布はそのようにして可能な限り最も迅速な方法でアムステルダムへ運ばれた。しかし時間の節約と品質の低下の少なさということとひきかえに、この直接貿易では中核的<sup>スティーブル</sup>な主要市場であるバタヴィアを経由してのアジア域内貿易が提供する諸可能性を利用できなかった。それゆえ1636年に総督が共和国向けの全てのインド輸出品もまた例外なくバタヴィア経由で送ることと命じたのである<sup>2)</sup>。

付録1において1616年から1660年までの船の動きのできる限り完全な一覧が与えられている。すでに述べた会社の貿易形態の変化のほか、スーラトが提供した船の数もまた注目に値する。2つの時期——1633年—1636年と1648年—1654年——を例外として、毎年スーラトに5隻—9隻のVOCの船が到着した。VOCが1633年—1635年に12隻—16隻もの船をスーラトに派遣したのはインドの西海岸での戦争状態と関係している。主に海上で戦われた会社とポルトガル人との間の紛争の間、ポルトガルのカラック船やフリゲート船〔fragata〕に対してVOCの商船団を防衛するために

護衛艦が任務についた。ゴアの封鎖が一度事実となり(1636年-1645年)、インド西海岸におけるポルトガル人の海事能力が大部分打破された後は、そのような護衛艦は不必要になった<sup>3)</sup>。1648年-1654年の時期にも会社は通常より多い数の船をスーラトへ向けて艦装した。すでに述べたように、VOCは1648年の商館の略奪に対して、1648年と1649年に海軍力の誇示やスーラトの封鎖、2隻のグジャラート船のハイジャックなどの手段によって賠償金を獲得しようと試みた。この遠征の窮極的目的はスーラトとアチューの間のグジャラート人の貿易の妨害であった。第1次対英戦争(1652年-1654年)の間には、敵のイギリス人をその貿易ネットワークの中心で攻撃するために船舶の西部アジアへのより大規模な集中が必要とされた。それゆえ積載能力に関してはこの数年あきらかな過剰能力がいわれた。すなわちバタヴィアとスーラトの商品輸送や西部アジアにおける地域間貿易の遂行のためには総数5隻-9隻の船で十分であったようである。会社がスーラトに派遣した船の規模と貿易量との間には全くあるいはほとんど関係がなかった。我々が後に見るように1620年-1660年の時期における最大量の商品を会社は1640年前後の年に運送した。しかしその数年間にスーラトから出帆した船の総数にはこの輸出の多量さは反映されていない。したがって船の総数あるいは全積載能力は貿易の量についてはほとんど何も語らない。VOCの船は、会社の修史官ファン・ダムが指摘したように、「浮かぶ城」としての軍事的役割をも持っていた<sup>4)</sup>。スーラトの実際の輸出入量を推定するためには、我々はVOCの文書館に現存するスーラトに出入りした船の送り状を見なければならないのである。

## 1. 2 スーラトからの輸出

スーラトから出帆した全ての船の送り状が残っている17年間について輸出品の規模と構成が表1に再現されている。もしその間の送り状の欠落した年においてもあまり大きな変化が生じなかったとみなせば、これらの

表1 VOCによるスーラトからの商品の輸出

1621-1622, 1623-1625, 1628-1632, 1634-1635, 1636-1641, 1643-1644, 1647-1648, 1650-1651, 1653-1654, 1655-1656年。(百位で概数化)

貿易シーズン	バヤナ藍 (蘭ポンド)	カルケージ藍 (蘭ポンド)	全体比	綿布 (反)	(グルデン)	全体比	その他の物産	全体額 (グルデン)
1621-1622	111,600	46,900	19,000 ±62%	22,600	19,500 ±13%	奴隷, アロエ (ロカイ), 馬	±150,000	
1623-1624	150,700	82,600	±35,300 ?	±120,000	±150,000	絹, 奴隷, 綿糸, ホウ砂, 米, 馬	±360,000	
1624-1625	124,000	303,600	139,800 41%	±230,000	313,800 55%	硝石, ホウ砂, 封臘	566,500	
1628-1629	179,300	148,000	15,500 34%	±170,000	260,000 55%	硝石, タバコ, 米	±475,000	
1629-1630	161,200	142,300	±188,000 ±48%	181,800	271,600 ±40%	硝石, 小麦, 綿糸, 米	±682,000	
1630-1631	0	0	0	0	0		0	
1631-1632	217,700	116,600	98,300 41%	152,900	248,000 32%	硝石, 綿糸	770,300	
1634-1635	199,700	361,700	73,000 52%	73,000	208,200 30%	硝石, 綿糸, 綿花, 小麦	692,400	
1636-1637	125,000	187,200	184,300 52%	108,300	231,700 31%	硝石, 綿糸, 綿 花, プチユク	745,600	
1637-1638	64,400	97,600	193,100 28%	?	592,200 56%	硝石, 綿糸, 小麦, 乳香	1,051,000	
1638-1639	38,600?	52,100	402,200 36%	318,000	753,000 52%	硝石, 綿糸, 小麦, 絹	1,437,700	
1639-1640	149,700	145,000	447,300 57%	?	282,500 35%	硝石, 綿糸, カチョウ [カチチュ, アカシヤ科 の木から抽出した成 分], アヘン, プチユク	811,100	

1640-1641	422,300	431,000	51,400	38,600	50%	292,200	310,200	33%	硝石, 綿糸, 絹, 小麦	944,000
1643-1644	209,900	178,800	117,600	80,100	25%	235,100	584,500	57%	硝石, 綿糸, ダイ ヤモン, ド, ラック	1,017,200
1647-1648	145,000	179,400	3,900	3,200	27%	305,600	389,200	58%	硝石, 絹, 小麦, アヘン	672,300
1650-1651	25,400	35,100	17,200	9,500	6%	403,600	665,000	84%	綿花, 綿糸, 絹, 小麦	791,200
1653-1654	96,700	126,400	0	0	17%	153,700	458,100	61%	綿糸, ダイヤモン, 絹, 小麦, 絹	756,000
1655-1656	137,400	148,000	23,900	13,800	22%	188,800	448,600	61%	綿糸, 小麦, ダイ ヤモン, ド, 硝石	±732,000

訳注：総額に上のついでいる数値は百位で概数化したものよりさらに大雑把な数値と思われる「約」と解してよいだろう。全体比の±も同じ。

データを手がかりに輸出品の規模と構成を大体推定できる。

貿易がうまく軌道に乗りはじめた1624年から30年代まで総輸出額は毎年50万-70万グルデンの間であったろう。1631-1632年のシーズンの輸出額はやや高いが、この場合これらの数字は2つの貿易シーズンに關したものであるという事実を考慮に入れなければならない——なぜなら1630-1631年のシーズンにはVOCの船が1隻もスーラトにあらわれなかったから。さらに1638年-1644年の時期には輸出自体が、とくに藍の輸出の拡大により、またそれほどではないが綿布の輸出の増大により、明らかにより高いレベルにあったということが入手できた資料から明白である。その後、1644年から1660年までの期間は、とくに藍の輸出の減少のせいで、相対的な下落を示した。輸出額は1640年前後の80万-140万グルデンから70万-80万グルデンの水準にまで下落した。われわれは輸出額のかんりの高下動を考慮に入れなければならないけれども、それでも1640年前後に輸出額が最高であったということができよう。その後、最初の2、30年のそれよりあまり高くないレベルにまで輸出額が減少した。

いくつかの輸出品に関しては最終の販売市場を特定することが可能である。アーグラの南西の地域からのバヤーナ藍とアフマダーバードの北西〔正しくは南西〕の地域からのサルケージ藍の大部分はアムステルダムへ輸出され、オランダの毛織物業で使用された。藍の需要は1640年までかなり一定であった。会社の毎年の「注文 eis」はバヤーナ藍約20万ポンドとサルケージ藍15万-20万ポンドからなっていた。1640年-1642年の短期間の、しかし目のさめるような上昇の後、その後の時期に共和国からの需要がバヤーナ藍5万-10万ポンド、サルケージ藍2万-5万ポンドにまで低下した。インド産の藍はこの時期より安くてより良質のアメリカ産の藍との競争において負かされたのである。ムガル朝インドの藍の新しい販売市場を中東にみつけようとする会社の試みはあまり成功しなかった。藍の輸出は減少し、それに比例して総輸出額に占める藍の割合が減少した。

アーグラ以東や、グジャラートのアフマダーバード、バローダ、ブロー



チなどの生産地で購入された無数の種類の綿織物はヨーロッパやアフリカ、アジアの販売市場に向けられた。ヨーロッパとアフリカに向けられた量は1660年までの時期にはかなり限られていた。オランダからの注文、とくに西アフリカでの奴隷貿易において交換手段として使用された粗布は精々で3万反 stuks であった。ヨーロッパでの綿布に対する爆発的な需要はようやく17世紀の最後の2,30年間に起こった。ヨーロッパにおけるモードの変化と特に購買力の増大がインドの織物のヨーロッパへの輸出を顕著に増大させたのである<sup>5)</sup>。しかし17世紀前半にはインド製の織物の大部分は会社によってバタヴィアに送られ、そしてこの主要市場からモルッカ諸島へ香料との交換手段として、またジャワ〔各地〕、台湾、マラッカ、シャムへ送られた。主要市場として、および流通センターとしてのバタヴィアの役割により、アジア向けの綿布の最終目的地をこれ以上追求することはむずかしい。ペルシアやモカでも会社はムガル朝インド製の綿布を売った。最大限で反物の総輸出額の3分の1がスーラトからの直接貿易でこの地域で販売された。第2, 4, 5章で私は藍と綿布の輸出について詳述するであろう。

藍と綿布に次いで硝石もまた重要な輸出品であった。この安価な火薬原料はバラスト〔底荷〕として大量にアムステルダムに向けて船積みされた。しかし1650年以後ベンガルが次第に硝石の供給者の役割を奪いはじめた<sup>6)</sup>。綿糸もとくにアムステルダムへ送られた。織物業（とりわけファスチアン織の）で加工される綿糸に対するオランダからの「注文」は1640年から1660年までの間に年間3万ポンドから8万ポンドへと上昇した。1650年以後会社はさらにマラバルとセイロンにこの製品の販売市場を見いだした。

絹織物やダイヤモンドのような高価な奢侈品はスーラトから出帆した船の荷の無視できない部分を構成した。絹は一般にアフマダーバードで買われジャワで売られた。絹は生糸の形でインド商人によって陸路ベンガルからアフマダーバードへ移送され、そこでさらに専門の織布工によって加工

された。中国やベンガルの生糸をアフマダーバードで売ろうとした会社の試みは少しも成功しなかった。特にベンガルの生糸に関してはそのことは驚くべきことである。1646年にVOCによってベンガルから送られた生糸はグジャラートでの販売の際にわずかに13%の利益しかもたらさなかった。スーラトの〔VOCの〕長官によれば、パトナとアーグラを経由してグジャラートへ生糸を運送するインド商人はわずか8-10%の利益でこれを売った<sup>7)</sup>。この研究で再三立ち戻ってくる1つのテーマは、多くのルート上で商品の陸上運送費が海上運送費よりあまり高くなく、その結果多くの商品に関して実際会社はインド商人——彼らは大変低い総経費しかいらず、それゆえ大変低い粗利潤率で満足できた——に太刀打ちできなかったということである。

アムステルダム向けのダイヤモンドが1643年から常に船の積荷の一部分を構成した。その年VOCはアフマダーバード出身の宝石商兼金融業者であるサンティ・ダース Santi Das〔シャンティ・ダース〕とゴールコンダの諸鉱山産のダイヤモンドの供給に関する契約を締結した。しかし1660年頃サンティ・ダースやグジャラートの他のインド商人との契約は停止された——なぜなら、ダイヤモンド鉱山により近いコロマンデル海岸の諸商館に担当させる方がより有利だと思われたからであった<sup>8)</sup>。

表1の「その他の物産」の項は、小麦と米——それらは時々かなり大量に原綿、亜麻仁油、からし菜の種子〔油用〕、ガムラック〔ラックかいがらむしの分泌した天然樹脂・染料〕、石けん、ブチュク（葉・焚香料として用いられた〔ヒマラヤ原産の菊科の植物の根〕）などと同じようにバタヴィアに送られた<sup>9)</sup>。船の底荷として送られたこれらの安価で嵩高な商品は価値で計れば全輸出の小さな部分しか構成しなかった。しかし重量では、積荷の大部分はこのような低価値の物産からなっていた。食料品の貿易はかなり大規模な性格さえもっていた。たとえば1650-1651年にVOCの諸船が小麦300トンとジョワール（雑穀〔もろこし〕）24トンのスーラトから運んだ。1656-1657年には小麦317トン、米245トン、「豆 boontjens」（お

そらくムング *mung* あるいはモトゥ *moth*) 15トンを、すなわち38,000グルデン相当を運んだ。米、小麦、バター、さまざまな豆類のような食料品はバタヴィア、セイロン、マラッカへ向けられた。特にバタヴィアの都市民を養うために会社はアジアの余剰地域から大量の食料を輸送した。ベンガルほどには重要でなかったけれども、グジャラートもまたこの食糧不足の都市の食糧補給の際に重要な役割を果たした<sup>10)</sup>。

要約すれば、1620年—1660年の期間にVOCの輸出品の中味に1つの変化が生じたということが出来る。タバコ、奴隷、硼砂、甘松油などいくらかの物産が消え去り、ダイヤモンド、絹、石けん、ブチュクが輸出品の荷の中に加えられた。しかし輸出にとって全体としてこれらの変化はかなり些細なことであった。それよりはるかに重要なのは2つの最も重要な輸出品——藍と綿布——の間に生じた変化である。ほぼ1645年頃まで藍の輸出と綿布のそれとが相互に大体均衡していた。その時以後綿布が決定的にリードし、そしてこの地位を18世紀末までもはや譲らなかつたといえる。

### 1. 3 スーラトへの輸入

会社にとってムガル朝インドでの商品の買付けの財源をまかなうためには種々の可能性があった。原則として最も単純な方法は貨幣ないし地金形態の現金を輸入し、それをスーラトでルピー貨に鑄造し、次いでその現金を手形手段によってグジャラートとヒンドゥスターンのさまざまな商館に配給することであった。第2には、販売可能性のある商品をムガル朝インドで販売し、その利潤をもって輸出商品に対する支払いをすることであった。アジア全体に枝分かれした貿易ネットワークをもつVOCのような組織にとって、これは明らかに貿易の財源を確保するための最も魅力的な方法であった。このアジア域内貿易は、香料、胡椒、藍、綿布等々の形でアムステルダムへ送られることのできる余剰を供給するにちがいないと思われた。もしヨーロッパから運び込まれた金銀と商品の販売で獲得された現

金がインド商品の買付けの資金を十分にまかなうことができなければ、次に可能なことはインドの金融市場に訴え出てインドの金融業者より現金を借りて、それからその借金を次のシーズンに返済することであった。

1620年—1660年の時期には会社はこれら3種の資金調達可能性——貴金属の輸入と商品販売、資金借入れ——を共に利用した。しかしそれら相互の割合はこの期間中一定ではなかった。17世紀半ばまで会社はムガル朝インドでの取引の財源の大部分を輸入した金銀でまかない、時々借金で補っていた。商品販売の収入はこの時期まだあまり重要でなかった。しかしほぼ1650年頃スーラトでの貿易の性格が構造的に変化するという1つの変化が起こった。商品の販売からの収入が大変大きく増大したので、貴金属の輸入を減少させることができた。特に銅と丁子の販売収入の増大により、より少量の金銀の輸入で十分になった。その際1640年頃にくらべて1645年以後はムガル朝インドからの輸出が減少したことも1つの役割を演じた。この比較的低レベルの輸出貿易と商品販売からの比較的高収入とによりVOCとムガル朝インドとの貿易関係の性格が変化した。すなわち、次第に商品対貨幣の交換のかわりに商品対商品の交換に基礎を置く取引が発達した。この節で私は特に諸〔交換〕手段獲得の規模とそれら相互の割合について記述するつもりである。

貴金属の輸入の完全なデータについては我々は1628—1629年の貿易シーズンに関してしか持っていない。その年会社は562,000グルデンのオランダからの金銀をスーラトに送った<sup>11)</sup>。1628年より以前および1629年—1635年の時期における貴金属の輸入についてのデータは完全に欠如しているか不完全である。しかし我々がそれらの年における輸出のレベルを見るならば、1635年までの会社による貴金属の輸入は1628年のそれよりあまり多くなかった——すなわち約50万グルデンであった——であろうということが首肯できるだろう<sup>12)</sup>。1638年までムガル朝インドへの金銀の流入は事実上完全にレアール・ファン・アフテン貨、レーウェン・ダールデル貨〔ネーデルラントの銀貨〕、レイクス・ダールデル貨〔ネーデルラントの銀貨〕、

デューカート貨、地金の金からなっていた。これらの貴金属の大部分は共和国から送られた。しかし1638年以後、何年間かの間、日本からの金ととりわけ銀がヨーロッパからの貴金属にかなりの程度とってかわった。それ以上でさえあった。すなわちこの日本の「スホイト銀」の注入によって会社がムガル朝インドで自由にできる資本の総額が大変顕著に増大した。アムステルダムでの銀の輸出入がしばらく停滞した時にあたる17世紀の30年代末に会社が日本銀に対するほぼ排他的な支配権を獲得できたのは会社にとって大変幸運であった<sup>13)</sup>。

1640年以後、ペルシアとモカからの金銀の輸入も始まった。1650年以後一時期バスマもそれに加わった。総督は1640年にペルシアの会社員たちに、ムガル朝インドからの綿布の販売によって、次のシーズンの〔綿〕布の買付けの財源としてスーラトに送るべき現金を稼ぐよう命じた。その結果としてそこから余った額はバタヴィアや共和国向けの商品の買付けのためにムガル朝インドで用いられるべし、と。スーラトやアジアの他の貿易拠点への貴金属の供給者としてのペルシアの諸商館の新しい役割はVOCの貿易ネットワーク内でのペルシアの役割の変化と結びついていた。1640年以後の時期に会社は次第に絹〔生糸〕<sup>ゼイデ</sup>の輸出から貴金属のそれへと転換していった。会社は安価なベンガルの絹をますます好むようになった。ペルシアはVOCの貿易ネットワークの中で次第にアジアやヨーロッパからの商品の販売事業所としてのみ機能するようになった——「従って本国での絹〔生糸〕の販売からよりも内陸〔すなわちアジア域内〕貿易における現金からの方がより多く利益をあげることができたのである…。」<sup>14)</sup> ペルシアで売られた香料その他の商品からの収入はアッパーシー銀貨、レアール・ファン・アフテン貨、レイクス・ダールデル貨の形でスーラトや他の商館へ送られた<sup>15)</sup>。

それゆえ1639年からのVOCの政策は、ムガル朝インドでの貿易の財源は日本銀とそして後にはペルシアとモカからの貴金属でできるだけ多くまかない、共和国からの金銀の使用をできるだけ減らすことを目標とした<sup>16)</sup>。

表2 VOCによってスーラトに輸入された金銀, 香料類, その他の商品の販売額の推定

1628-29, 1635-1648, 1650-1651, 1652-1657, 1659-1660年(単位1,000グルデン)

	金と銀の輸入						商品の販売					全 体 計  1+2+3+ 4+5+6
	バ タ ヴィ ア	日 本	ペ シ ア	ル ア	モ カ	合 計	全体比	香料類	全体比	その 他 の 商 品	全体比	
	1	2	3	4	1+2+ 3+4		5		6			
1628-1629	560	0	0	0	560	?	?	?	?	?	?	
1635-1636	?	?	?	?	660	?	?	?	?	?	?	
1636-1637	450	0	0	0	450	?	?	?	?	?	?	
1637-1638	411	0	0	0	411	?	?	?	?	?	?	
1638-1639	109	705	0	9	823	?	?	?	?	?	?	
1639-1640	?	?	?	?	1000	?	?	?	?	?	?	
1640-1641	38	604	62	2	707	70%	93	9%	208	21%	1008	
1641-1642	150	997	0	0	1148	84%	95	7%	113	8%	1356	
1642-1643	151	300	96	85	632	78%	88	11%	91	11%	811	
1643-1644	101	450	200	111	863	?	?	?	?	?	?	
1644-1645	126	494	235	105	961	71%	233	17%	154	11%	1348	
1645-1646	186	0	263	89	538	69%	149	19%	92	12%	779	
1646-1647	?	0	190	90	?	?	148	?	174	?	?	
1647-1648	0	0	217	0	217	35%	177	28%	277 <sup>[1]</sup>	36%	622	
1650-1651	0	0	519	0	519	53%	250	25%	212	22%	981	
1652-1653	?	?	?	?	?	?	328	?	365	?	?	
1653-1654	?	?	?	?	?	?	479	?	354	?	?	
1654-1655	?	?	?	?	?	?	138	?	464	?	?	
1655-1656	0	0	474 <sup>[1]</sup>	0	474	40%	356	30%	337	29%	1168	
1656-1657	0	0	321 <sup>[2]</sup>	0	321	30% <sup>[3]</sup>	238	29%	261	32%	812	
1659-1660	?	?	?	?	?	?	462	?	389	?	?	

1) ペルシアとモカからの輸入の合計。

2) バスラからの輸入を含む。

出典: J.P.Coen, *Bescheiden*, V, p. 588; VOC 1135, f. 489v.; VOC 1144, ff. 464r.-466v.; VOC 1157, ff. 475r.-478v.; VOC 1153, f. 746r.; VOC 1168, ff. 590r.-593r.; VOC 1188, f. 575r.; VOC 1221, ff. 119r.-121v.; VOC 1224, f. 195v.; VOC 1408, ff. 806r.-819r.; VOC 1121, ongef. 1606r.; VOC 1119, p. 1754.

訳注 [1] 277は227の誤りと思われる。

[2] 321は312の誤りであろう。

[3] 金銀の対全対比は30%ではなく39%となる。

しかしVOCが1640年からともかくも1660年まで、共和国から送られる金銀の大規模な利用を必要とすることなくムガル朝インドで貿易することに成功したのは、単に日本やペルシアからの貴金属の輸入の増加によるのみでなく、この時期に商品の販売からの収入が大いに増大したという事実にもよる。表2では、運びこまれた金銀のルピー貨への交換の後および商品の販売の後に会社が所持できた資本金の量とその構成についての推計がなされている<sup>17)</sup>。

インドで売られた商品は2つの範疇に分類される。すなわち香料(丁子、肉荳蔻、ロンペン〔菌でそこなわれた下等の肉荳蔻〕、荳蔻花)とその他の物産。後者の中には会社が香料に次いで売ろうとした30種以上の物産が分類できる。後者のうちで最も重要なものは、銅、錫、ピューター、白檀、蘇芳、茶、樟脳などのアジアの他の地域からのものであり、次いで水銀、朱、毛織物、象牙 ivoor〔アフリカ産〕などのようなヨーロッパから送られた品物であった。しかしこれら非アジアの物産の割合は小さかった。スーラトで売られた商品の総販売額中でアムステルダムから送られた商品のそれは5-10%以上を占めなかった。商品販売からの収入増加を会社は主に1650年以後の2、30年間のムガル朝インドにおける丁子〔販売〕での自らの独占的地位と日本の棹銅に関する自らの特権的地位に負っていた。自らの丁子輸入の独占と銅市場での支配的な地位、そしてこれらの市場支配の増大から生ずる高収入がグジャラートとヒンドゥスターンの諸商館をして1650年以後貴金属の輸入への依存を少なくさせたのである。スーラトで売られた商品から得られた利益は、1641年-1650年の時期の年平均17万グルデンから1651年-1660年の時期の32万グルデン、1661年-1670年の時期の50万グルデンを経て、1671年-1680年の年平均約70万グルデンにまで増大した<sup>18)</sup>。販売物産の総収入に占める丁子と銅を合計したものの割合は1641年-1650年の時期の25%から1651年-1660年の時期の50%へと増大した。丁子市場については私は本章の終わりで立ち戻る。銅は第3章ではじめて論じられるであろう——なぜなら私はとくに銅の通貨機能に照明を当てる

つもりだからである。すなわちVOCによって運びこまれた銅の大部分は、ムガル朝インドで流通していた銅貨であるパイサ貨 *paisa* に鑄造されたものである。従って全体として1650年以後VOCの輸入において銀と金の役割を銅がかなり奪ったといえることができるであろう。

17世紀後半にスーラトのVOCの事業所はペルシアの諸商館の先例を追いさえした。すなわち、それは銀と金の輸入者から、VOCの商品の販売によって稼いだルピー貨の輸出者へと再編された。1662年に総督マーツァイケル *Maetsuycker* は、スーラトで商品販売で得た現金で単に輸出商品を買うことができるだけでなく、「ベンガル貿易もまたそこからロピヤ貨幣でもって大いに補助され得る——今年明らかにされているように」と考えた<sup>19)</sup>。その年VOCはスーラトからベンガルへ325,000ルピーを送った<sup>20)</sup>。グジャラートの諸商館は、17世紀の後半において急速に拡大するベンガルの貿易の財源をまかなうためにこのような方法で貢献したのである<sup>21)</sup>。1700年以後の何十年間かは、おそらくグジャラート産織物に対する当時増大しつつあったヨーロッパでの需要により、スーラトからのルピー貨の輸出がストップした。しかし18世紀後半にスーラト商館は再びアジアのVOCの他の諸事業所への金銀の供給者としての役割を果たした。グジャラートから輸出された貴金属の大部分はその時もまたベンガルに姿を現わした<sup>22)</sup>。

それゆえ、ムガル朝インドにおける貴金属の重要かつ恒常的な輸入者としての会社の一般的なイメージは大いに修正に値する。1620年—1660年の時期においてスーラトへの金銀の流入はたしかにコンスタントでなかったし、まして常に大量でもなかった。この流入の頂点は1640年前後に置くことができる。その当時年間70万—110万グルデンが金ととりわけ銀で輸入された。その後輸入は年間50万グルデンかそれ以下にまで減少した。17世紀中頃会社は商品（特に丁子と銅）の販売からの収入をかなり高めることに成功し、そしてそれでもって綿布、藍等々の買付けの財源としたのみならず、何年間かはその余りをベンガルへ送金することさえできたようであ



る。我々がインドを全体としてみる時、スーラトとヒンドゥスターンの商館は実際例外的であった。コロマンデル海岸やベンガルでは、会社は商品の販売から多くの収入を得ることに全くあるいはほとんど成功しなかった。そこでは買付けは圧倒的に輸入された金銀という手段で行なわれた<sup>23)</sup>。

#### 1. 4 借入れ手段による資金調達

1620年—1660年の時期のほぼ全体にわたって会社はアジアやヨーロッパの販売市場に向けての商品のムガル朝インドでの買付けの財源を輸入された金銀および商品販売の収入でだけでなく、ムガル朝インドで借りた現金によってもまたまかになった。インドにおける金融市場の役割については第3章で立ち戻るであろう。ここでは貿易の資金としてインドで借りた資本の役割について解明することのみが重要である。

ほぼ1638年頃までムガル朝インドの諸事業所の外部からの資金供給は、貿易シーズンの最初の月々にバタヴィアあるいはオランダからの船舶の到着によって行なわれた。しかしそれ以前の月々にすでに、貿易に便利なように若干の支出がなされた。4月と5月における船の出帆直後すでに綿布の供給のために織布工たちに前貸金が投資され、また藍栽培者たちに前貸金が供給された。しかし最も重要な支出は本来の貿易シーズン、すなわち9月から5月までの間になされた。10月から2月までは一般に藍を、9月から4月までは綿布を買付けた。そのころの数年間バタヴィアやオランダからの資本供給は、輸出の資金を完全にまかなうには不十分であった。なぜなら、会社はムガル朝インドで通常貿易シーズンの終わりに10万—20万グルデンをインドの金融業者から借金しており、それはやっとな次のシーズンにバタヴィアからの船の到着によって返済されたと1628年に明確に述べられているからである<sup>24)</sup>。

1638年以後日本銀が重要な役割を果たした何年間かは、資本供給は全体として貿易シーズンの終わりにより多くなされた。通常9月に若干の金銀

を積んでモカからの船が到着し、10月と11月にバタヴィアからの船が、1月から3月までペルシアからの船が、そして大抵4月に高価な積荷をした船が台湾から到着した。〔会社による〕商品の販売は主に1月から3月までになされた。それら供給された商品に対する支払いは一般に供給後2ヵ月後に行なわれた。これら全てが会社が自己の貿易の財源をまかなうための資金をようやく貿易シーズンの末期に獲得することが次第に多くなったことを示しているように思われる。資本の需要期とその供給期とのこの時間差によって、1638年以後に借りられた借金の大部分は短期のそれであったし、おそらく同シーズン中に日本とペルシアからの船の到着によって返済されたであろうと当然推測できる。このように、インドの金融業者から借りた借金はこの毎年繰り返される短期間の資金不足を埋めたのである。しかしここまで描かれたイメージは完全には正しくない。表3に見ることのできる1638年-1644年の時期の負債の急増は単に短期の負債の増加からだけでは説明できない。すなわち輸出が大いに増大したこの数年間においては、日本とペルシアからの貴金属の供給は全ての負債を支払うには不十分であったし、このケースでは借金額の返済は後になってなされたのである。たとえば1639年1月にムガル朝インドでの会社の負債総額は、120万グルデンであった。4月の705,000グルデンの日本銀の到着後にいくらかの借金を返済できたが、輸出商品の発送の後の1639年6月にまだ635,000グルデンの負債を背負ったままであった。その額はようやく次の貿易シーズン、あるいはおそらくもっと後に返済された。ここで我々は核心的問題に直面している。すなわち我々はどの程度2、3ヵ月後に、すなわちそのシーズンの終わるか次のシーズンの初めに返済される短期の融資に関係があるのか、そしてどの程度おそらく数年後に返済される長期の融資に関係するのか。どの程度インドの金融業者がムガル朝インドでのVOCの貿易に融資したのか。この地域で借りられた負債の総額についてのデータが載っている表3は、借金の期間について少しも我々に告げてくれない。しかし1637-1640年のアーグラ事業所に関するデータから、そこ

表3 ムガル朝インドにおけるVOCの負債総額(千位で概数化)  
(単位千グルデン)

年 月 日		年 月 日	
1622-?	406	1640-10-26	220
1626-4-6	60	1641-12-9	773
1627-7-19	200以上	1642-2-25	833
1628-4-18	150以上	1643-1-26	423
1628-10-20	250	1644-2-24	715
1629-7-20	60	1644-4-30	919
1631-1-12	400以上	1645-4-9	582
1631-1-29	約540	1645-4-22	321
1631-6-21	550以上	1645-5-?	0
1631-12-22	664	1653-6-3	240
1632-?	495	1653-11-11	400
1633-1-15	300	1654-4-18	450
1636-1-24	400以上	1654-5-31	131
1637-12-31	600~700	1655-2-6	286
1639-1-22	1,200	1655-4-15	380
1639-6-24	635	1656-4-12	530
1639-10-30	636	1656-6-2	267

出典：VOC 853, f. 117v.; J. P. Coen, *Bescheiden, I*, p. 802; VOC 1092, ongef. 368r.; J. P. Coen, *Bescheiden, VII*, 2, p. 1265, 1467; VOC 1097, f. 432v.; VOC 1103, ongef. 121r.; idem, f. 226v.; idem, f. 274r.; idem, ongef. 86r.; *Daghregister Batavia*, 1631-1634, p. 87; VOC 1106, ongef. 7v.; VOC 1117, f. 722v.; VOC 1127, f. 30v.; VOC 1128, f. 260v.; VOC 1132, ongef. 736r.; Coll. Geleynssen no. 110, 24-6-1639; VOC 1134, f. 149r.; VOC 1139, f. 390r.; Coll. Geleynssen no. 161, 25-2-1642; VOC 1141, f. 319v.; VOC 1150, f. 37v.; VOC 1151, f. 920r.; Coll. Geleynssen no. 283, 9-4-1645; VOC 1157, f. 503r.; VOC 1165, f. 419v.; VOC 1201, f. 686r.; VOC 1201, f. 705r.; VOC 1203, f. 737r.; VOC 1208, f. 469v.; idem, f. 745r.; VOC 1215, f. 577v.

では借金が平均して3½-6ヵ月後に返済されたと結論できる<sup>25)</sup>。1645年のスーラトの〔VOC〕長官の発言はまさに同一の見方を示している。1645年は一般的なパターンからの幸運な例外をなした——なぜならその年会社は借金のために頭を下げなかったから。輸入した金銀の交換の後に、また商品の販売——それは推計で総計130万グルデンを獲得した——の後に、同商館は船の出帆後の5月に「今まで得たこともない」16万グルデン

をまだ所有していた<sup>26)</sup>。それゆえ会社はその年利子損失に直面しなかったし、長官の推計では通常より5%安く商品を買ったのである。〔これは〕借金が通常5-6ヵ月間のものであった——その当月月利0.875-1%であったので——と推測するためのなおさらの理由〔である〕。1646年-1647年にも会社は借金から開放されていたが、その後は再び借金を余儀なくされた<sup>27)</sup>。

結論として、1645年と1646年-1647年およびおそらく若干の不明年を除いて、会社はムガル朝インドで買った物産を自己の資本で十分にまかなうことができなかったということができる。借金の大部分はその貿易シーズンの終わるか次のシーズンの初めに返済された。借金のうちのどのくらいかわからないがおそらく小部分は、おそらく5-6ヵ月以上会社によって借りられたであろう。特に輸出がその絶頂にあった1638年-1644年の時期がそのケースであっただろう。会社は「利子が利益を飲み込む」<sup>28)</sup>ということを十分認識していたが、しかしもっと資金を送るようにとの社員たちの絶えざる要請を承認できる状態にはなく、会社の輸出の資金調達のためにインド人金融業者の短期の融資にかなりの程度依存しつづけたのである<sup>29)</sup>。

## 1. 5 香料の販売

特にクリストフ・グラマン(Kristof Glamann)の研究以後、会社が香料貿易を取獲から販売まで独占できるようになるまで、そして丁子や荳蔻花、肉荳蔻、シナモンの競争相手の販売者のことを考慮することなくヨーロッパやアジアで価格を決定することができるようになるまでに数十年かかったと一般的にみられている。最も重要な香料である丁子の供給の完全な支配はようやく1650年以後の話である。丁子や他の香料に対する会社の支配の頂点は1680年-1730年の時期であるとグラマンによってみなされている。しかし〔上述の〕香料類よりはるかに重要な物産である胡椒の独占を会社はけっして達成しなかった。これと関連して重要なグラマンの別の1つ

の結論は、香料をまず第1にアジアで売ることが会社の政策であったということである。もっぱらアジアでの需要が充たされた時のみ、会社の第一義的なアジア域内貿易の補助として香料類をヨーロッパへ送ったという。ほぼ全香料の3分の1がVOCによってアジアで販売された。アジアではムガル朝インドが香料の最も重要な販売市場であった<sup>30)</sup>。

我々は香料のムガル朝インドでの販売に関する会社の政策を3期に区分できる。17世紀の30年代初めまで会社は香料を自ら内陸の諸販売市場まで運送した。次の時期に、すなわちほぼ1635年頃から17世紀の中頃まで、十七人会が丁子のダンピング政策を決定した。大変低い価格によってイギリス人、デンマーク人、インド人の競争者たちをムガル朝インドの市場から締め出すことが試みられた。この時期会社員たちはもはや香料の配送に従事しなかった。全輸入商品は一括してスーラトで販売された。1650年頃このダンピング政策は完成した。アジアでもヨーロッパでも実行された価格政策と島嶼部の生産地域に対する暴力的手段によって獲得された強力な支配とのおかげで、会社は切望していたこの独占——その実現のために会社は大量の暴力とエネルギーを投入した——の成果を摘むことができた。しかしこの最適な市場支配の状況下でも諸問題が生じた。まず第1に、喜望峰経由のイギリス船や中東の陸路経由の隊商という手段による輸送が利益をもたらさないようにヨーロッパとアジアにおける販売価格を正確に調整しなければならなかった。第2に、独占者にとって常に最重要な問題であるが、言うに足る需要の減退があらわれない限りでできるだけ高い利潤が得られるようにヨーロッパとアジアでの最適価格を決定しなければならなかった<sup>31)</sup>。

会社はそのムガル朝インドでの滞在の初めから1630年頃まで香料を内陸部の諸市場へ運び、そこでは最高の価格を実現できた。大抵それはアーグラにおいてであり、そこは宮廷の近辺として確実に購買力のある需要を保証した。アーグラは同時にインド商人の北インドへの流通市場としての役割も演じた。会社は弾力性の少ない需要に接して、少量ずつの販売により

価格を騰貴させようと努力した。しかし会社はこの努力の際に香料を供給する他の商人たちによる相当の妨害を経験した。イギリス人もまた香料をアーグラで売るかあるいはスーラトでインド商人に売り、後者がそれをアーグラに運んだ。さらにイギリス人やデンマーク人、ポルトガル人の船がコロマンデル海岸のマスリパタムへマカッサルから——マカッサルは、1669年のVOCの奪取まで会社の独占制度の最大の漏れ口とみなすことができる——香料を運んだ。

インド商人はこれらの香料を隊商によってマスリパタムからアーグラに運んだ。しかし、アーグラで大いに価格攪乱の作用を伴ったこのコロマンデル海岸からの流入にたいしてVOC自身も全く責任がないことはなかった。すなわち、会社がコロマンデル海岸で売った香料の量は、地方的、局地的な販売市場にとってはあまりに多量であった。さらに現地の社員は高価格維持よりもできるだけ大量に販売することの方により多くの関心があり、アーグラの同僚たちの言によれば、大変安く売りすぎた。ベルサールトによれば、彼が丁子をアーグラで1ポンドあたり3.84グルデンで販売したのに、コロマンデル海岸では平均1.80グルデンで手離された<sup>32)</sup>。この大きな価格差によって陸路でのアーグラへの輸送はやりがいのあるものとなった。その結果は、会社がスーラト経由で送った香料がアーグラで、彼らがコロマンデル海岸に送った香料との競争に遭遇したことであった。アーグラとスーラトの社員の激しい抗議のあと、1628年に会社はよりましな政策を実行した。亜大陸に輸送される丁子の総量に占めるスーラトの割当てが、マスリパタムのその犠牲において増大した。この供給割合の改善により、またシャー・ジャハーンのアフマドナガルに対する遠征中デカンの諸道路が商人に対してほぼ完全に閉ざされたという好条件によって、アーグラでの価格が短期間騰貴した<sup>33)</sup>。アーグラでのこの短期間の「偶発的」販売独占の間、会社はそれ以前の年々より100%以上高い価格でさえ丁子売った（付録2参照）。

しかしこの良好な状況は長くは続かなかった。なぜなら1630年—1631年

の饑饉の後スーラトの〔VOCの〕長官が送られてきた全ての香料を直接スーラトで販売することを決定したからである。丁子の販売をアークラに集中しようとする会社の政策はいくつかの事態の発展によって挫折させられた。饑饉がスーラトとアークラの間の輸送を高価で大変危険なものにした時に緊急政策として始められながら、送られてきた全てのVOC物産をスーラトで販売することがその後習慣化した。危険性と高い輸送費の他にここには次のような別の考慮もあった。すなわちこの方法によって会社はより早く借金を返済でき、利子支出の負担を減らすことができた<sup>34)</sup>。この時から会社は単に輸入者としてのみ行動し、自己の物産の最適市場の追求をインド商人に委ねたのである。

内陸部での販売を不必要にした別の1つの状況は、1635年頃に会社が丁子のダンピング政策に移行したことであった。その独占を打破しようとするイギリス人やデンマーク人の競争者の意欲がそれ以前の数年間に大いに増大したということを会社の重役たちはヨーロッパ市場で実感していた。まだ十分に支配していない市場で丁子をできるだけ高く売ろうとするVOCの政策は多くの競争相手を誘引した。「クラッデン cladden」政策ないしは「クラッディング cladding」政策——そのようにダンピング政策は呼ばれた〔「クラッデン」の原義は「汚す」〕——と島嶼部の諸生産地のより強固な支配のみが競争相手をアジアとヨーロッパの市場から排除することができるであろう。さらに低価格により丁子の需要が増大するであろうと期待された<sup>35)</sup>。ダンピング政策との関連で会社は何年間かアムステルダムで株券保有者に配当を一部分丁子で支払った。時の経過と共に競争相手は香料市場から決定的に撤退するであろう、そうすればその後で会社が価格を強力に引き上げることができるであろうと期待された。すぐに約500万グルデンの収入不足が解消されるだろうと総督ブラウワー Brouwer は期待した<sup>36)</sup>。

競争相手の排除と消費の拡大を目的として十七人会によって施行されたこの新政策をスーラトの社員たちはわずかに部分的にしか実行しなかつ

た。なるほど彼らは1636年にスーラトで丁子をその年以前より50%以上安い価格で販売したけれども、効果的なダンピング政策にとってそれに劣らず必須の他の2つの条件は充たされなかった。社員たちはムガル朝において新しい低価格を一般的に知らせることをしなかったし——ファン・ディーメン Van Diemen によれば、彼らはそのことを「トランペットでもってのように〔広く〕」知らせるべきであったのに——、またその物産をできるだけ多くの消費者に分配しようとしなかった<sup>37)</sup>。すなわちスーラトでは1つの合弁企業——ここではスーラト最大の商人兼金融業者であるヴィールジー・ヴォーラが会社の両替商兼仲買人であるナーン・パーラクおよび後者の死後はその息子モーハン・ダース・パーラクと共にそのメンバーであった——に大部分を売却したのである。VOCはまた何年間か別の、しかし同じように小グループの商人たちにも販売した。スーラトで会社の全商品を買ったこれらの商人たちの要請で、丁子の販売価格——「それは人がそのまわりで踊るところの花嫁である」——は固く秘密にされた<sup>38)</sup>。その合弁企業が自らが買ったのと同じほど安い価格で丁子を販売するつもりがなかったことは明らかである。我々がもっている若干のデータは、会社の販売価格と消費者向けの市場価格との間に相当の格差があったことを指摘している。1637年にその格差はスーラトで46%、アージェラでは実に150%であった。しかしこの最後の例では当然我々は輸送費を考慮しなければならない<sup>39)</sup>。1648年に消費者価格はVOCの「卸売価格」より49-57%高かったし、1649年には34%高かった<sup>40)</sup>。デカンでは1661年に、消費者向け価格は40%高かった<sup>41)</sup>。インドの消費者はVOCから購入した合弁企業よりも少なくとも3分の1多く丁子に対して支払ったように思われる。丁子を会社から購入した商人たちは単純な方法で大変大きな利益を得ていたことであろう。この利益の一部分はスーラトの会社員をももうけさせていたことであろう。このような選別的販売方法なので、ダンピング政策の効果を疑うことができる。インドの消費者がVOCのダンピング政策にあまり気づいていなかったということは想像できる。低価格という手段による



市場拡大は最小限度にとどまったであろう。

スーラトの社員たちは、全ての商品を小グループの商人たちに売るように決めた彼らの決定——後者はこの方法でムガル朝インドにもたらされたほぼ全ての香料を入手したのだが——を、ヴィールジー・ヴォーラヤナン・パーラク、モーハン・ダース・パーラクが会社の最も重要な金融業者であると指摘することを通して、疑い深い総督に対して防禦した<sup>42)</sup>。当然これらの会社への投資家たちは優先権を享受した。前面に持ち出された別の同じように説得力のない議論は、これらの商人のみが全ての商品を——売れるものも売れないものも——買占めるのに十分な資本力を持っていたということである<sup>43)</sup>。他のインド商人たちもまた輸入された商品を一括して買上げる用意があったことがあきらかになった時に、この最後の主張の矛盾がただちに露呈した。これらのインド商人による会社の商品の購入は彼らにとって大変利益のあるものであった。1646年にヴィールジー・ヴォーラは単にムガル朝インドに運ばれた商品だけでなく、会社がペルシア向けに送ってきた荷物までも買占めることさえ提案した。彼はこれらをペルシアにある自らの流通網を通して販売する予定であった<sup>44)</sup>。しかしこの提案は総督によって拒否された。

スーラトの会社員たちがバタヴィアからの命令で別の販売システムを導入するための1つの試みを行なった1657年まで、2、3年の例外をのぞいて、もっぱらヴィールジー・ヴォーラおよびナン・パーラクまたは〔後者の代わりに〕モーハン・ダース・パーラクに対して売られた。しかしアフマダーバードのナガルシェーツ *nagarseth*（商人たちの長）たるサンティ・ダースに対する1642年—1643年と1648年—1650年の販売と会社の仲買人たるスングル・ダースに対する1653年—1654年の販売は、さまざまな商人を互いに競争させて物産に対してより高い価格を獲得しようとしたものではないようで、スーラトの社員と契約者たちとの間の結託に対する当時の疑惑が全て根拠のないものであることをバタヴィアの上司たちに見せようとするスーラトの社員たちの意図的な政策であった。しかし彼らは全

での疑いを取り除くことには成功しなかった<sup>45)</sup>。

1650年以後の時期に総督がムガル朝インドでの丁子を再び「価格どおり」に戻すことを命じた。今やヨーロッパとアジアにおける成功した価格政策とより向上した支配の後、デンマーク人とイギリス人の貿易がほとんど停止され、この独占の果実を摘む時期となった。会社の商品により高い価格を獲得するためには、ムガル朝インドで物産毎に、あるいはもっと利益のあがる包み毎に、競売によって販売しなければならない。このような公開の販売方法の1つの波及効果は、不正を働く可能性が減少するであろうということであった。1652年にバタヴィアからの命令に対する1つの返事においてスーラトのVOCの長官は次のような議論で依然として公開競売に反対していた。ヴィールジー・ヴォーラとモーハン・ダース・パーラクがまだ大部分の丁子を在庫しており、会社が公開販売に切替えるやいなや彼らは疑いもなくそれらを市場でダンピング販売するであろう<sup>46)</sup>。会社が競争相手を市場から締め出すためにヨーロッパやアジアで大変成功裡に採用したのと同じの方法が今度は彼ら自身に対して用いられるであろう、と。しかし総督は疑念を増大させており、新政策に固執した。そして長い遅延の後1658年にスーラトで初めて一物産（胡椒）をいわゆる日本方式で販売した。この販売システムでは、関心ある商人たちは前もってある特定の物産毎にそれぞれ個別に入札を行なった<sup>47)</sup>。それゆえ公開販売も包み毎の販売もお話にならなかった。したがってこの販売方法でも商品の大部分がヴィールジー・ヴォーラと彼の合弁企業の手中に集まったということは何ら驚きを呼び起こさない。その後の何十年かの間私的契約による価格合意はほとんど減少しなかった。会社の修史官たるピーター・ファン・ダムによれば、スーラトのVOCの長官には「毎回販売日の前に〔荷物の〕山々に封をする直前に〔tegens het sluyten van de partijen〕あれこれの商人たちと秘かに契約して、1マン [34.5ないし36.25ポンド相当の重量単位] につきある額を、そして1セント [価値の単位] につきある額を自分の方へ獲得し、それを自分の財布に入れる」という習慣があった<sup>48)</sup>。全17世紀

中（そしておそらく18世紀にも）スーラトの社員たちは私的な価格交渉と手数料という手段によって自己の給与を補う可能性〔方法〕を利用したのである。

アジアで実施されたダンピング政策およびとくに暴力によって実現された島嶼部の生産地域のより厳重な支配のおかげで会社がムガル朝インドで販売できた丁子の量が17世紀後半にかなり増加した。付録2に見られるように、会社は1626—1627年——信頼できるデータのある最初の年——にスーラトに25,000ポンドの丁子を輸入した。スーラトからバタヴィアへ伝えられた注引量は1624年から1632年までの時期には20,000—25,000ポンドの間であった。その後輸入は1641年—1650年の時期の年50,000ポンドからその後の10年間の年平均65,000ポンドへ増加した。1661年から1670年までは供給量が年平均46,000ポンドへとやや減少したが、その後販売規模は年75,000ポンドにまで増加し、1681年から1690年までは年平均85,000ポンドにさえ増大した。17世紀の最後の時期も供給高は年平均75,000ポンドという高水準を維持した。したがって会社ははじめの2、30年間の時期にくらべて3倍もの多量の丁子を17世紀末にムガル朝インドで販売したと結論できよう。1700年頃の丁子の販売価格は1631年のスーラトでのそれ——すなわち1ポンド当たり3.60グルデン—4.00グルデン——と同じほど高かった。この2つの高価格期にはさまれて、会社のダンピング政策の影響下に20年間の大変安い価格の時期（1635—1654）があった。アーグラでの価格はほぼ常にスーラトのそれより高かった。しかし実際の価格差を算出するためには輸送費と利子損失——1634年のある推定によればそれらは全体で販売価格の3分の1に相当した——をアーグラの販売価格から差引かねばならない<sup>49)</sup>。

会社はその競争相手の犠牲においてムガル朝インドの丁子市場における自らのシェアの拡大に成功しただけなのか、それとも会社がその低価格政策によって丁子の総需要を増大させたと証明できるのか。この問題——それは実際この物産の価格に対する需要の柔軟性の程度にかかっているのだ

が——は、会社の修史官たるピーター・ファン・ダムが、そして彼に次いで最近クリストフ・グラマンが深く探求した<sup>50)</sup>。ベルサールの『レモンストラッセン覚書』の内容を肯定しつつ引用して、ファン・ダムは会社の到来以前には1626年の3倍もの多量の丁子がムガル朝インドで消費されていたと述べている<sup>51)</sup>。16世紀と17世紀初めにその供給の大部分を握っていたポルトガル人は低価格で販売したので、その結果大いに消費の伸張があったという。ファン・ダムはこの根拠にもとづいて一層の販売拡大をめざしたVOCの価格政策を訴えた。彼の反対者であるピーテル・デ・ヴィット Pieter de Witt は反対に、会社は1664年から1684年までの時期に——スーラトでの価格の暴騰にもかかわらず——1664年より以前の同一期間におけるよりも多量の丁子を販売したと述べた。このことにより彼は香料の需要は価格上昇によって全くあるいはほとんど影響されなかったことを「証明した。」<sup>52)</sup>

しかし、一層の販売拡大をめざした価格政策を主張したファン・ダムも、需要が全くあるいはほとんど価格動向に敏感でなかったと主張したデ・ヴィットも、2つの前提から出発した——すなわち、スーラトでの会社の販売価格と消費者価格との間にあまり大きな格差がない（それゆえ、いいかえれば、VOCのダンピング政策が消費者の市場価格にも影響を与えた）ということ、そして第2に、2人とも競争相手による供給について不十分な推計しかしていないことである。需要の柔軟性の程度についての疑問に答えるためには、消費者価格を知ることが必要である。我々は実質上もっぱら会社の販売価格〔のデータ〕のみを持っているにすぎないのであるが、しかし我々が〔すでに〕言及した若干の「バーザール価格」〔のデータ〕は、特に1635年—1654年の時期——その時に会社が大変安い価格で販売したのだが——に、会社の卸売価格と消費者価格との間に相当の格差があったにちがいないことをあきらかに示している。ムガル朝インドで丁子を買った消費者がVOCの価格政策に少ししかあるいは全く気づかなかった可能性は大いにある。したがって、「契約者たちは実際上独占者たちの一部分で

あった』<sup>53)</sup>とのG. G. マーツァイケルの非難は、丁子に関しても確かに正当化できる——その合併企業もまた一定の限界内で活動しなければならなかったということが見失われてはならないけれども。もしその販売価格があまり高く定められると、VOCが香料を販売したバルシアやマラバール海岸から香料がスーラトに運ばれてくる危険性があった。しかし全体として我々はVOCの販売価格から丁子について需要の価格に対する柔軟性に関して何らかの結論を引き出すことは少しも意味がないと断言できる。

第2に、効果的な独占を確立する以前に会社がムガル朝インドで販売した香料の量をそれが市場を独占した時に送った量と比較し、そこからデ・ヴィットがしたように、丁子に対する総需要が価格の上昇にもかかわらず下落しなかったと結論することは正当でない。つまり、1650年以前にはイギリス人、デンマーク人、インド人の船による輸入が相当のものであったにちがいない。たとえば1637年にスーラトのムタサディー所属の1隻の船が45,000ポンドの丁子をアチューからスーラトに運んだ。それはその年のVOCによる輸入とほとんど同じ程の量であった<sup>54)</sup>。1650年までの時期には会社はムガル朝インドにおける丁子の重要な輸入者ではあったが唯一の輸入者ではなかったということが見過されたのである。

VOCの物産を買占めたインド商人たちの市場政策や流通政策が不明なので、1635年から1654年までの時期のVOCの価格政策の影響下でムガル朝インドにおいて丁子の消費が増大したかどうかの質問は大体解答することが困難である。唯一言えることは、VOCがダンピング政策のおかげとモルッカ諸島に対する支配の拡大の結果により、以前よりかなり多量の丁子を販売することに成功したということである。しかし、丁子の総需要が増大したかどうかは疑わしい。とくにVOCの輸入の増大は香料輸入の競争相手の犠牲においてであった。デンマーク人、イギリス人、インド人の船による丁子の輸入は1650年以後無視できるほどであった。この時からVOCのみが香料をムガル朝インドに輸入したのである。

ムガル朝インドの販売市場だけを見る時、なぜVOCがそこで約20年間

もの長い間ダンピング政策を採用してきたのかを一見ではよく理解できない。もしマカッサルの封鎖と香料諸島に対する支配の拡大で満足したのであったなら、おそらくムガル朝インドで同じほど多量の丁子を、しかしはるかに高い価格で、販売できていたであろう。しかし会社の重役たちは供給線の支配のみでは市場の永久支配を保障しないと確信の下で、二正面——生産地域と消費地域——での市場支配の政策を決定したのである。さらにダンピング政策は、価格を引下げた時どれほどその物産に対する需要が増大するかを追求することを可能にした。とくにこの最後の点に関して、ムガル朝インドにおける会社員たちはVOCのダンピング政策を不熱心にしか実施しなかったように思われる。なるほど彼らは低価格で販売したが、流通〔方法〕の改善や消費の拡大のためにさらに積極的に努力しはしなかった。そのことによって、会社の商品を買占めた商人たちがVOCのダンピング政策から利益を得たように思われる。インドの金融業者に対する負債と、しかし特にスーラトの社員たちの私利が、ムガル朝インドでの香料の販売に関する一貫した政策を不可能にしたのである。1655年以後会社は遂にスーラトでの販売政策に対するより大きな統制力を獲得したが、その時にもまた利益の一部分は会社ではなくその社員たちに流れたのである。

〔第1章 完〕

## 付記

今回(Ⅳ)の訳出に当たっては、一部の箇所につき、(Ⅰ)(Ⅱ)の際と同様鳥井裕美子氏(大分大学)の御教示をいただいた。また桜田美津夫氏(就実女子大学)の御教示もたまわった。ここに記して深甚な謝意を表します。

付録1. スーラトにおけるVOCの到着・出帆船隻数、1616年—1660年

航海シーズン	到着		出帆地								出帆		目的地																
	b	c	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	d	e	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y
1616—1617年	1	1												1 <sup>2)</sup>	1														1 <sup>8)</sup>
1617—1618	2	2											2 <sup>2)</sup>		0														
1618—1619	0	0													0														
1619—1620	0	0													0														
1620—1621	2	2	1										1 <sup>4)</sup>		2														
1621—1622	4	4	2										2 <sup>4)</sup>		4														
1622—1623	7	7	6				1								6														
1623—1624	5	7	2	1			1								5		2												
1624—1625	4	8	3	1			4								4		2												
1625—1626	9	15	6	3			6								9		2												
1626—1627	8	12	2				4								8		2												
1627—1628	8	15	8				7								8		3												
1628—1629	7	13	5				6								7		4												
1629—1630	6	11	6				5								7		6												
1630—1631	0	0													0		7												
1631—1632	9	15	9				6								9		4												
1632—1633	9	10	5				3								9?		2												
1633—1634	14	15	5				3								13		3												
1634—1635	12	16	10	2			4								13		6												
1635—1636	16	16	16?												10?		8												
1636—1637	4?	6?	4?				2								5		2												
1637—1638	7	11	7				4								7		6												

a	b	c	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	d	e	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y
1638-1639	5	8	1		4			2		1					5	8	4		4										
1639-1640	7	7	3				2	2		1					7	9	6		2	1									
1640-1641	7	9	3		2	1		3							7	9	2		6										
1641-1642	9	13	6		5?			1							8	14	5		7	1									
1642-1643	8	12	5		4	1		1			1				9	12	3		7	1									
1643-1644	6	9	4		3	1		1							6?	9?	4?		4	1									
1644-1645	8	11	5		3	1		2							8	12	4		3	2									
1645-1646	9	14	6		6	1		1							9	13	3		7	1									
1646-1647	9	13	3		6	1		1				1			9	12	2		7	2									
1647-1648	9	12	6		4	1		1							9	13	3		5	2									
1648-1649	11	18	7		7	2		2							9	13	3		7	1									
1649-1650	13	19	8		6	2		2							12	19	4		10	2									
1650-1651	11	15	3		6	2		2				1		1 <sup>5)</sup>	13	19	5		6	2									
1651-1652	12	15	2		6	1		2	3			1			10?	15	3		7	1									
1652-1653	10?	11?	2?		1?	1?		1?							6 <sup>5)</sup>	9?	9?	1?	5									2 <sup>9)</sup>	
1653-1654	16	21	6		1			6	2						3 <sup>6)</sup>	14?	17?	12?	5									2	
1654-1655	9	9	8		1										9	9	3		5	1									
1655-1656	5?	7?	?		3										9	9	3		5	1									
1656-1657	8?	8?	4					3						1 <sup>7)</sup>	5	7	3		1	1						1		1	
1657-1658	?	?						1	2						9	11	4		2							4			
1658-1659	?	?													?	?	?		2										
1659-1660	?	?													?	?	?		2										

1) 1616-1660年の時期におけるスーラトからの、あるいはスーラトへの船舶の動向の十分な実像はかなり追求されたが、完全には達成できなかつた。たとえばそれぞ  
 1) 1616-1660年の時期におけるスーラトからの、あるいはスーラトへの船舶の動向の十分な実像は互いに一致していない——論理的には、入港したのとは異なるが、若  
 一の年においてスーラトからとスーラトへの船隻総数は互いに一致していない——論理的には、入港したのとは異なるが、若  
 一の年についてはこの差異は老朽船が時々スーラトで解体されたという事実によって十分説明されるであらう。また船がマンスーンをのがして夏の月々の間スーラ  
 トに滞留したということも実際起こった。しかしこれは到着船隻数と出帆船隻数との間の差異のそれぞれについて説明するには十分な理由ではない。

- 2) バンタムより到着。
- 3) スーラトの南で坐礁。
- 4) ガンデイグイ [スーラトの近く] で新建造。
- 5) 出帆港不明。
- 6) スイムドより到着。
- 7) 喜望峯より到着。
- 8) バンタムへ出帆。
- 9) アーレント号はスーラトで解体。



## 付録2. スーラトとアーグラでの丁子の販売量と価格、売上高 1615年-1698年

年	販売量 (蘭ポンド)	スーラトでの価格 (グルデン)	アーグラでの価格 (グルデン)	VOCによる売上高 (グルデン)
1615		1.76-2.10		
1616		2.29-2.65		
1617		2.51		
1618		3.50	4.83	
1619				
1620				
1621		2.83	4.80-5.40	
1622		3.30		
1623			3.60-4.32	
1624				
1625			4.32-4.56	
1626			3.84	
1627	±25,000 <sup>(1)</sup>	2.47	3.00	± 62,000-75,000
1628		3.53	3.31-7.20	
1629		2.65-3.71	2.42-5.40	
1630		4.78	6.60	
1631		3.15-3.54	6.24-10.80	
1632		3.58	4.92-5.88	
1633		3.07	4.80-5.04	
1634		2.22-2.39	3.26-3.76	
1635		2.35	4.00-4.17	
1636		1.22		
1637	±50,000	1.49		± 75,000
1638	±35,000	1.32-1.49	1.52-2.26	± 46,000-79,000
1639	±40,000	1.64	1.60-1.87	± 64,000-75,000
1640		1.36		
1641	60,014	1.09-1.18		61,651
1642	43,534	1.29-1.31		± 56,000-57,000
1643	28,919	1.35-1.52		39,708
1644				
1645	98,459	1.32		128,690
1646	54,791	1.32		± 73,000
1647	25,233	1.32		± 33,000
1648	76,491	1.37		104,625
1649	60,545	1.36		± 82,000
1650	62,187	1.66		±103,000

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社

年	販売量 (蘭ポンド)	スーラトでの価格 (グルデン)	アーグラでの価格 (グルデン)	VOCによる売上高 (グルデン)
1651	92,094	1.72		157,132
1652	62,957	1.72		±108,000
1653	117,586	1.72		224,707
1654	119,734	2.52		±310,000
1655	30,631	2.56		95,516
1656	95,160 ?	2.42		229,958
1657	53,915	2.46—2.65		133,570
1658	19,085	3.64		± 70,000
1659	80,085	2.98—3.84		±238,000—307,000
1660	53,650	4.04		±217,000
1661	55,708	3.48		±194,000
1662	27,575	3.61		±100,000
1663	56,369	4.17		±235,000
1664	14,138	3.97		± 56,000
1665	56,550	4.00		±226,000
1666	23,245	4.07		± 95,000
1667	75,146	4.04		±304,000
1668	50,424	4.14		±209,000
1669	41,216	4.29		±177,000
1670	61,417	4.17		±256,000
1671	68,031	3.87		±263,000
1672	70,791	4.04		±286,000
1673	65,506	4.14		±271,000
1674	123,531	3.97		±490,000
1675	74,875	3.84		±288,000
1676	46,051	3.74		±172,000
1677	95,464	3.74		±357,000
1678	52,055	3.71		±193,000
1679	96,715	3.77		±365,000
1680	71,376	3.95		±282,000
1681	76,815	3.97		±305,000
1682	95,703	4.04		±387,000
1683	70,251	4.06		±285,000
1684	76,635	3.97		±304,000
1685	95,383	3.61		±344,000
1686				
1687	100,000	3.61		±361,000
1688	57,335	3.61		±207,000

年	販売量 (蘭ポンド)	スーラトでの価格 (グルデン)	アーグラでの価格 (グルデン)	VOCによる売上高 (グルデン)
1689	77,549	3.91-4.14		±303,000-321,000
1690	194,371	4.00-4.04		±777,000-785,000
1691				
1692	12,688	3.87-3.97		± 49,000-50,000
1693	81,329	3.59		±292,000
1694	115,252	3.61-3.64		±416,000-419,000
1695	92,578	3.49-3.54		±323,000-328,000
1696	100,780	3.64-3.72		±367,000-375,000
1697	96,320	3.59		±346,000
1698	100,956	3.66-3.78		±369,000-382,000

出典：H. Terpstra, *Westerkwartieren*, pp. 216, 228; P. v. d. Broeck in Azië, II, p. 253; VOC 1068, ff. 435r., 435v.; VOC 1073, ongef. 161v.; VOC 1074, ongef. 229v.; VOC 1079, ongef. 193v.; idem, ongef. 205r.; VOC 1092, ongef. 368r.; J. P. Coen, *Bescheiden*, VII, 2, p. 1194; VOC 1100, f. 172r.; idem, f. 178r.; idem, f. 182v.; VOC 1097, f. 432v.; J. P. Coen, *Bescheiden*, VII, 2, p. 1683; VOC 1098, f. 493r.; VOC 1098, ongef. 590r.; VOC 1100, f. 166r.; idem, f. 185r.; VOC 1099, ongef. 303v.; VOC 1103, ongef. 127r.; idem, ongef. 176v.; idem, f. 228v.; VOC 1109, f. 102r.; VOC 1103, f. 265r.; *Daghregister Batavia, 1631-1634*, p. 87; Coll. Geleynssen no. 32, 1-9-1631; VOC 1109, ff. 112r., 112v.; idem, f. 121v.; idem, f. 189v.; VOC 1108, ongef. 73r., 73v.; VOC 1106, ongef. 11v.; VOC 1112, f. 993v.; VOC 1117, f. 515r.; *Daghregister Batavia, 1631-1634*, p. 416; VOC 1117, f. 550r.; idem, f. 444r.; VOC 1122, f. 603v.; VOC 1121, ongef. 1605r.; VOC 1130, p. 1145; VOC 1128, f. 231v.; VOC 1132, ongef. 543r.; idem, ongef. 543v.; VOC 1134, ongef. 500v.; Coll. Geleynssen no.101, 17-4-1638; Coll. Geleynssen no. 103, 5-2-1639; VOC 1133, f. 366v.; VOC 1408, ff. 807r.-807v., 810r.-811r., 815r.-815v.; Coll. Geleynssen no. 97a, 10-11-1639; Coll. Geleynssen no. 101, 31-3-1638; VOC 1135, f. 489v.; VOC 1144, ff. 464v.-466v.; VOC 1157, f. 475r.; VOC 1153, f. 746r.; VOC 1168, ff. 590r.-593r.; VOC 1188, f. 575r.; VOC 1224, f. 195v.; VOC 1221, ff. 119r., 119v., 121r., 121v.; P. v. Dam, *Beschrijvinge*, II, 3, pp. 131-133; K. Glamann, *Dutch-Asiatic Trade*, pp. 301-302.

訳注〔1〕±は「前後」「約」の意味である。以下同じ。

原注

第1章 ムガル朝インドにおけるVOCの貿易

- 1) マラバール海賊の危険性は、よく武装されたVOCの船舶にとってさえ決して幻想ではなかった。1641年と1642年にフリーヘント・ヘルト号とドルフェイン号が襲撃された——その襲撃に抵抗できたけれども。しかし1653年にはワーペン・ファン・バタヴィア号がマラバールの海賊によって拿捕された。VOC 1139, f. 407r., P. Croock aan A. v. Diemen, Surat, 28-11-1641; *Daghregister Batavia, 1641-1642*, p. 189, januari 1642; VOC 1139, f. 292r., W. Geleynssen aan P. Croock, Bandar Abbas, 8-2-1642; VOC 1201, f. 681v., G. Pelgrom aan C. Reniers en Raden, Surat, 3-6-1653; *Daghregister Batavia, 1653*, p. 104, 23-7-1653.
- 2) F. S. Gaastra, *De VOC in de zeventiende en achttiende eeuw: de groei van een bedrijf*, p. 261; VOC 858, p. 512, A. v. Diemen en Raden aan B. Pietersen, Batavia, 21-6-1636.
- 3) ゴアの封鎖については特に N. MacLeod, *De Oost-Indische Compagnie II*, pp. 98-104, 108-113, 130-136, 144-146 を見よ。
- 4) P. v. Dam, *Beschrijvinge, II, 3*, p. 36.
- 5) P. v. Dam, *Beschrijvinge, II, 3*, p. 103; K. Glamann, *Dutch-Asiatic Trade*, pp. 136-139; K. N. Chaudhuri, *The Trading World of Asia*, pp. 277-299; J. de Vries, *The Economy of Europe*, pp. 187, 188; W. H. Moreland, *From Akbar to Aurangzeb*, pp. 123-126; H. Furber, *Rival Empires of Trade*, p. 239; Om Prakash, *Bullion for Goods*, p. 160; S. Chaudhuri, *Trade and Commercial Organization*, pp. 195-201.
- 6) W. H. Moreland, *From Akbar to Aurangzeb*, pp. 118-122; H. Furber, *Rival Empires of Trade*, pp. 255-257.
- 7) VOC 1162, ongef. 121v., A. Barentse aan Bewindhebbers, Surat, 26-1-1647; ベンガルからグジャラートへの絹〔生糸〕の輸送については以下を見よ。J. B. Tavernier, *Travels, II*, p. 2; K. N. Chaudhuri, *The Trading World of Asia*, p. 354; S. Chaudhuri, *Trade and Commercial Organization*, pp. 178-192.
- 8) VOC 866, p. 548, A. v. Diemen en Raden aan P. Croock en Raad, Batavia, 15-9-1642; VOC 1144, f. 441v., P. Croock aan A. v. Diemen en Raden, Suhali, 3-5-1643; *Daghregister Batavia, 1643-1644*, p. 181, juli 1643. ゴールコンダのダイヤモンド鉱山についてはさらに以下を見よ。J. B. Tavernier, *Travels, II*, pp. 41-76; *Daghregister Batavia, 1663*, pp. 367-372; 31-7-1663; P. v. Dam, *Beschrijvinge, II, 3*, pp. 176-192; T. Raychaudhuri, *Jan Company in Coromandel*, pp. 171-173.
- 9) 石けんは大部分「マラッカの貧民たち」向けであった(原文通り。同市の衛生状態の改善のためか?)。VOC 867, p. 690, A. v. Diemen en Raden aan P. Croock, Batavia, 14-9-1643.

- 10) VOC はたとえば 1678 年に 1,000 トンの米をベンガルから輸出した。Dagbregister Batavia, 1678, p. 657, 18-11-1978. また S. Chaudhuri, *Trade and Commercial Organization*, pp. 244-245 を見よ。
- 11) J. P. Coen, *Bescheiden*, V, p. 588, J. P. Coen aan J.v. Hasel, Batavia, 18-8-1629.
- 12) A. ボス・ラドワンは VOC が 1629 年と 1633 年の間に〔年平均〕 1,380 万グルデン以上（原文のまま）を現金と商品でスーラトに輸入したと考える。しかしこれは VOC 1106, ongef., 31v., Schriftelijke Relatie Ph. Lucasz, 1632 の誤った解釈にもとづくものである。ルーカスゾーンは、数年間の買付けをまかなうためには、そのぐらい莫大な量の商品や金銀が輸入されなければならないだろう、と述べたのである。しかしそのように多量の輸入は決して実現しなかった。A. Bos Radwan, *The Dutch in Western India, 1601-1632*, p.99.
- 13) K. Glamann, *Dutch-Asiatic Trade*, p. 58; F. S. Gaastra, *Het Aziatisch Gebied*, p. 269; H. Furber, *Rival Empires of Trade*, p.232.
- 14) *Generale Missiven*, II, p. 377, 31-12-1649.
- 15) VOC 864, p. 521, A. v. Diemen en C. v. d. Lijn aan P. Croock, Batavia, 28-8-1640; VOC 1130, p. 1119, B. Pietersen aan A. v. Diemen, Surat, 20-4-1639; VOC 1133, f. 368r., P. Croock aan A. v. Diemen en Raden, Surat, 21-4-1640; K. Glamann, *Dutch-Asiatic Trade*, pp. 119-123; F. S. Gaastra, *De VOC in Azië tot 1680*, p. 217; N. Steensgaard, *The Asian Trade Revolution*, p. 394.
- 16) 全アジアにおける VOC の貿易がアジア間貿易で稼いだ資本でまかなえるであろうというすでに J. P. クーンによっていだかれていた願望は、結局理想にすぎなかったように見える。とくに急増したベンガルでの貿易をまかなうために、1680 年からオランダは大量の金銀を再びアジアへ供給したのである。K. Glamann, *Dutch-Asiatic Trade*, pp. 56-61, 69, 70; F. S. Gaastra, *De VOC in Azië tot 1680*, pp. 211, 212; H. Furber, *Rival Empires of Trade*, p. 232.
- 17) 私はこの表で常に輸入貴金属の販売価格 verkoopwaarde を示そうと試みている。商品に関してはこれは大抵の場合何ら問題ない。なぜなら、1640-1641年, 1642-1643年, 1644年-1646年, 1647-1648年, 1651年-1657年については、輸入された商品の買付価格と販売価格の細目を伴ったリストが VOC 文書中に残されているからである。いくつかの例では貴金属の買付価格と販売価格もそこにある。この販売細目が欠けている場合には、私は 1685 年の I. ソールマンス Soolmans の諸リスト——そこでは 1641 年-1684 年の時期に販売された商品の価格と純量が収集されている——にもとづいて、年平均の量の再構成を試みている。しかしこれらのリストでは銀と金の販売価格が得られない。それゆえ私は貴金属に関しては、来航した船舶の送り状に言及されているところの買付価格を記録している。レアール・ファン・アフテン貨、日本のスホワイト銀、レイクス・ダールデル貨、デュカート貨等々に関

しては、大抵の場合買付価格と販売価格との間に2、3パーセントの格差があった。しかし特にペルシアのアップスィー貨の場合にはその格差がしばしば顕著なものであった。その貨幣が会社員たちによってペルシアで過大評価されたので、その貨幣はスーラトでしばしば10%以上の損失を伴って売られた。ペルシアの会社員たちはこの方法によって、販売した商品につき——人工的に——高い利益率をあげさせることでもって、総督を喜ばせることができた。しかし絹（〔生糸〕（やアップスィー貨）のような輸出品は高くついた。1654年にマーツァイケルがこのことに対して対処し、このペルシア貨幣の価値を他のアジアの貨幣やグルデンに対して約14%切下げた。VOC 878, pp. 410, 411, J. Maetsuycker en Raden aan G. Pelgrom en Raad, Batavia, 22-9-1654.

- 18) VOC 1408, ff. 819v., 820r., Rapport van I. Soolmans aan Gouverneur—Generaal en Heeren XVII, Batavia, 7-9-1685.
- 19) VOC 886, pp. 404, 405, J. Maetsuycker en Raden aan Directeur en Raad van Surat, Batavia, 25-8-1662.
- 20) たとえば *Generale Missiven*, IV, p. 175, 5-7-1677 を見よ。
- 21) ところでここでは、VOC商品の販売で稼がれたルビー貨が問題なのかそれともVOCが金や銀をスーラトに輸送してそこでルビー貨に改鑄させ、そしてそこからその後再輸出されたのかを決めることは必ずしも常に容易ではない。すなわち会社は1650年頃から次第にアジアで流通している諸貨幣間の為替レートの格差を利用していった。会社が全アジアに広げられた自己の情報ネットワークを利用して行なったこれらの複雑な為替操作はまだまだほとんど研究されていない。それゆえ1660年以後の時期にスーラトから輸出された銀の一部分はどこか他所から来て有利な為替レートのためにスーラトで貨幣に鑄造されただけであった可能性がある。
- 22) VOC 866, pp. 404, 405, J. Maetsuycker en Raden aan Directeur en Raad van Surat, Batavia, 25-8-1662; *Generale Missiven*, III, p. 775, 19-12-1671; idem, p. 891, 13-11-1673; K. Glamann, *Dutch -Asiatic Trade*, pp. 62-68; A. Das Gupta, *Indian Merchants*, p. 48; P. v. Dam, *Beschrijvinge*, II, 3, p. 213; F. S. Gaastra, *De Verenigde Oost-Indische Compagnie in de zeventiende en achttiende eeuw : de groei van een bedrijf*, pp. 262, 268.
- 23) T. Raychaudhuri, *Jan Company in Coromandel*, p. 197; Om Prakash, *Foreign Merchants and the Indian Mints*, p. 2
- 24) VOC 1094, f. 394v., Dagregister D. v. d. Lee, Surat, 18-2-1628.
- 25) pp.125 [第3章 3.9 アーグラにおける借金と手形, 1637年—1640年。未訳] を見よ。
- 26) Coll. Geleynssen no. 102, W. Geleynssen aan A. Barentse, Bandar Abbas, 2-2-1646. また *Generale Missiven*, II, p. 274, 17-12-1645; *Dagregister Batavia*,

1644-1655, p. 257, september 1645 を見よ。

- 27) VOC 1165, f. 419v., A. Barentse aan C. v. d. Lijn en Raden, Surat, 16-2-1647.
- 28) VOC 863, p. 134, A. v. Diemen en Raden aan B. Pietersen, Batavia, 1-3-1639.
- 29) 17世紀末にスーラトで再び120万-180万グルデンもの大金が利子付きで借りられた。P. v. Dam, *Beschrijvinge, II, 3*, p. 51.
- 30) K. Glamann, *Dutch -Asiatic Trade*, pp. 91, 103, 104. また以下を見よ。H. Furber, *Rival Empires of Trade*, pp. 88, 235; F. S. Gaastra, *De VOC in Azië tot 1680*, p. 216.
- 31) K. Glamann, *Dutch -Asiatic Trade*, p. 98.
- 32) F. Pelsaert, *Kroniek en Remonstrantie*, p. 267.
- 33) J. P. Coen, *Bescheiden, VII, 2*, pp. 1193-1201, H. A. Vapour aan J. P. Coen, Agra, 26-10-1627; F. Pelsaert, *Kroniek en Remonstrantie*, pp. 267-270; VOC 1194, ff. 404v.-405r., Verbaal over de handel door D. v. d. Lee, 12-6-1628; VOC 1100, ff. 192v., 193r., J. v. Hasel aan M. Ijsbrandts, Surat 2-5-1630; VOC 1100, ff. 185r., 185v., H. A. Vapour aan J. P. Coen, a. b. v. "Tholen", 24-4-1630.
- 34) VOC 1106, ongef. 11v., Ph. Lucasz aan Bewindhebbers, a. b. v. "'s-Hertogenbosch", 15-1-1633; VOC 1117, f. 497v., Korte Beschrijving van de handel door J. v. d. Graaff, 28-12-1634.
- 35) K. Glamann, *Dutch -Asiatic Trade*, pp. 95, 96; F. S. Gaastra, *De VOC in Azië tot 1680*, p. 184; P. v. Dam, *Beschrijvinge, II, 3*, pp. 119, 120; K. N. Chaudhuri, *The English East India Company*, p. 171.
- 36) VOC 857, p. 580, H. Brower en Raden aan B. Pietersen, Batavia, 13-10-1635.
- 37) Coll. Geleynssen no. 105, A. v. Diemen en Raden aan B. Pietersen, Batavia, 21-8-1637.
- 38) VOC 1201, f. 647r., G. Pelgrom e. a. aan C. Reniers en Raden, Surat, 24-2-1653.
- 39) VOC 1121, ongef. 1608r., B. Pietersen aan A. v. Diemen, a. b. v. "Middelburg", 8-4-1637.
- 40) *English Factories 1646-1650*, p. 206, President Breton to Comp., Swally Marine, 5-4-1648; idem, p. 257, 31-1-1649.
- 41) Y. Husain (ed.), *Selected Waqai of the Deccan (1660-1671 AD)*, p. 80.
- 42) VOC 1127, f. 123v., B. Pietersen aan A. v. Diemen, Surat, 18-4-1638.
- 43) ヴィールジー・ヴォーラとナーン・パーラクはまた潜在的買手たちを脅迫したという。その結果、「(人は言います) 他のどの商人たちもこの人たちを恐れて我々の商館をあえて訪れない、と。」一軒の店を開いて販売高を上げ、流通〔方法〕を改善しようとするスーラトのVOCの長官の(意図的な?) 努力は失敗した。「確実なこととはどの1人の人間も町の長官を恐れてそれについて関心を示さないことで

す。その長官は常連の契約当事者たちによって……うまく買収され、彼の仲買人たちを通して、誰かが密かに我々の家を訪れることを禁止させているということだす。」 VOC 1144, f. 366r., P. Croock aan A. v. Diemen en Raden, Surat, 28-2-1643.

- 44) VOC 1153, f. 669v., A. Barentse aan Raden van Indië, Surat, 10-2-1646.
- 45) VOC 1144, f. 366r., P. Croock aan A. v. Diemen en Raden, Surat, 28-2-1643; VOC 1180, ff. 793r., 793v., J. v. Teylingen aan Bewindhebbers, Suhali, 9-2-1651; VOC 1185, ff. 661r., 661v., J. v. Teylingen aan Bewindhebbers, Suhali, 31-1-1650; VOC 1203, ff. 721v.-722v., G. Pelgrom e. a. aan J. Maetsuycker, Suhali, 18-4-1654; VOC 876, p. 294, C. Reniers en Raden aan G. Pelgrom, Batavia, 21-5-1652. また J. B. Tavernier, *Travels, II*, P. 32 を見よ。
- 46) VOC 876, p. 294, C. Reniers en Raden aan G. Pelgrom, Batavia, 21-5-1652; VOC 1195, ff. 756v., 757r., G. Pelgrom aan C. Reniers en Raden, Suhali, 4-10-1652.
- 47) VOC 881, p. 444, J. Maetsuycker en Raden aan I. Koedijck en Raad, Batavia, 5-9-1657; VOC 882, p. 467, J. Maetsuycker en Raden aan L. Winnincx en Raad, Batavia, 21-9-1658; VOC 1224, ff. 267r., 267v., L. Winnincx aan Bewindhebbers, Surat, 2-2-1658; VOC 1233, ff. 106v.-108r., L. Winnincx en Raad aan J. Maetsuycker, Suhali, 26-3-1660.
- 48) P. v. Dam, *Beschrijvinge, II*, 3, pp. 34, 62.
- 49) これは饑饉の直後であった。通常の時期にはこの割合はかなり低かったであろう。VOC 1117, f. 497v., Korte Beschrijving van de handel door J. v. d. Graaff, 28-12-1634.
- 50) P. v. Dam, *Beschrijvinge, II*, 3, pp. 117-120; K. Glamann, *Dutch-Asiatic Trade*, PP. 103-108.
- 51) また F. Pelsaert, *Kroniek en Remonstrantie*, p. 270 も見よ。
- 52) P. v. Dam, *Beschrijvinge, II* 3, pp. 117-120.
- 53) VOC 878, p. 398, J. Maetsuycker en Raden aan G. Pelgrom en Raad, Batavia, 22-9-1654.
- 54) VOC 1128, p. 84, B. Pietersen aan A. v. Diemen, Surat, 7-7-1637.



参考文献〔第1章関係〕

1) 未刊行史料

Algemeen Rijksarchief te 's-Gravenhage

-De Verenigde Oost-Indische Compagnie 文書 (VOCと略称)

-Verzamelingen afkomstig van emploëys van de VOC. Collectie Geleynssen de Jongh.

2) 刊行史料

*Pieter van den Broecke in Azië*, deel II. W. Ph. Coolhaas(ed.), 's-Gravenhage, 1963.

*Jan Pietersz. Coen, Bescheiden omtrent zijn bedrijf in Indië*, 7 delen. H. T. Colenbrander en W. Ph. Coolhaas(eds.), 's-Gravenhage, 1919-1953.

*Dagregister gehouden int casteel Batavia, etc.*, 31 delen. J. A. van der Chijs en J. E. Heeres (eds.), Batavia en 's-Gravenhage, 1887-1931.

Pieter van Dam, *Beschrijvinge van de Oost-Indische Compagnie*, 7 delen. F. W. Stapel en C. W. Th. van Boetzelaer (eds.), 's-Gravenhage, 1927-1954.

*The English Factories in India 1618-1669*, 13delen. W. Foster(ed.). Oxford, 1906-1927.

*Generale Missiven van Gouverneurs-Generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie*, 7 delen. W. Ph. Coolhaas (ed.), 's-Gravenhage, 1960-1979.

F. Pelsaert. *De Geschriften van Francisco Pelsaert over Mughal Indië, 1627. Kroniek en Remonstrantie*. D. H. A. Kolff en H. W. van Santen. (eds.) 's-Gravenhage, 1979.

*Selected Waqai of the Deccan (1660-1671)*. Y. Husain (ed.), Hyderabad, 1953.

J. B. Tavernier, *Travels in India*, 2 delen. V. Ball en W. Crooke (eds.), London, 1925.

3) 二次文献

A. Bos Radwan, *The Dutch in western India, 1601-1632. A study of mutual accomodation*, Calcutta, 1978.

K. N. Chaudhuri, *The English East India Company: the study of an early joint-stock company 1600-1640*, London, 1965.

K. N. Chaudhuri, *The Trading world of Asia and the English East India Company 1660-1760*, Cambridge, 1978.

S. Chaudhuri, *Trade and commercial organization in Bengal, 1650-1720*, Calcutta, 1975.

A. Das Gupta, *Indian merchants and the decline of Surat c.1700-1750*, Wiesbaden, 1979.

H. Furber, *Rival Empires of trade in the Orient, 1600-1800*, Minneapolis, 1976.

F. S. Gaastra, *De VOC in, Azië tot 1680*, in *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, deel 7, Bussum, 1980, pp. 174-219.

グジャラートとヒンドゥスターンにおけるオランダ東インド会社

F. S. Gaastra, Het Aziatisch gebied, in, *Maritieme Geschiedenis der Nederlanden*, deel 3, Buzzum, 1977, pp. 266-297.

F. S. Gaastra, De verenigde Oost-Indische Compagnie in de zeventiende en achttiende eeuw: de groei van een bedrijf. Geld tegen goederen. Een structurele verandering in het Nederlands-Aziatisch handelsverkeer, in, *Bijdragen en Mededelingen betreffende de Geschiedenis der Nederlanden*, 91 (1976), pp. 249-272.

K. Glamann, *Dutch-Asiatic trade 1620-1740*, repr. 's-Gravenhage, 1981.

N. MacLeod, *De Oost-Indische Compagnie als zeemogendheid in Azië*, 2 delen, Rijswijk, 1927.

W. H. Moreland, *From Akbar to Aurangzeb*, London, 1923.

Om Prakash, Bullion for goods: international trade and the economy of early eighteenth century Bengal, in, *Indian Economic and Social History Review*, 13, no. 2 (April-June 1976), pp. 159-187.

Om Prakash, Foreign merchants and Indian mints in the 17th and the early 18th century, paper voor "Mughal Monetary Conference," Dukes University, 1981.

T. Raychaudhuri, *Jan Company in Coromandel 1605-1690. A study in the interrelations of European commerce and traditional economies*, 's-Gravenhage, 1962.

N. Steensgaard, *The Asian trade revolution of the seventeenth century. The East India companies and the decline of the caravan trade*, Chicago, London, 1974.

H. Terpstra, *De opkomst der Westerkwartieren van de Oost-Indische Compagnie (Suratte, Arabië, Perzië)*, 's-Gravenhage, 1918.

J. de Vries, *The economy of Europe in an age of crisis, 1600-1750*, Cambridge, 1976.